考慮した教会施設を見学し、実情を報告して欲しい」との要請があり実現したものでした。すでに冬の気配を感じさせるような曇りの日、金田湾を一望できる高台に建てられた（神奈川県教職員組合の保養所跡地）三浦修道院に到着すると、総長のシスター米田はじめシスター達が出迎えてくれました。土間の玄関を上がると応接室に通され建物の説明を受けました。三浦修道院は、聖母訪問会 2002 年第 12 回定期総会で採択された「私たちは神から創られた“いのち”のいとなみに立ち返りすべての生命との共生の価値に目覚めた礼拝と愛の交わりに生きる」との宣言に基づき、その具体化の一つとして「エコロジカルな生き方を探るミッションを持った共同体を置く」決定がなされ、2005 年に竣工されたとのことでした。エコロジーを考慮し、伽藍建築をイメージした設計、また将来建物が土に戻るために釘を使わない昔ながらの建築法を採用、建設にあたってはできるだけ瓦礫を出さないことに気を配ったそうです。床にはニスは塗ってなく、お御堂以外は外国産の木材を使用せず国産の木材を使って建設し、また雨水 40 トンをコンクリートのタンクに貯水、その水をトイレと畑に使用しているとのことです。また、大気中への二酸化炭素の排出を増加させないとされている、木質ペレットを燃焼させることによって温めた温水を、館内各部屋に配置したパネルを循環させ暖房を賄うシステムを採用していました。しかし、館内が広いため温かくなるのに時間がかかること、ひとつの部屋だけ暖めることができない、ペレットの値段が高く入手するのが困難なことなどの欠点があるとのことでした。太陽光パネルを使った発電に関しては、当初余った電気は東京電力が買い取ってくれることになっていたそうですが、一方的に買い取りのシステムを終了されてしまい、現在蓄電池の購入を考えているそうです。2005 年に三浦修道院の建設が始まったころには、近い将来社会全体のエコロジーに対する啓蒙活動がもっと盛んになり、国の政策や企業の意識も変わると予想していましたが、まだほど遠いようですと嘆いておられました。最後にシスター米田から是非読むようにと勧められたのが、教皇フランシスコが書かれ 2016 年に邦訳出版された『ラウダート・シ』でした。「『ラウダート・シ』を読み、私たちは間違っていなかったと背中を押された気がした」とおっしゃっていたのが印象的でした。「マタイ福音書の 25 章を生きよ」が創始者ブルトン司教様の遺言だったそうですが、そのお言葉を現在も忠実に守っている聖母訪問会の姿に感心させられました。